

広島なぎさ中学校

入試科目	算数	国語	理科	社会	総合	
試験時間	45分	55分	45分	45分	—	
配点	100点	100点	100点	100点	400点	
受験者平均点	53.0点	64.8点	55.9点	63.5点	237.2点	
合格の目安	得点	46点	57点	49点	55点	207点
	(%)	46.0%	57.0%	49.0%	55.0%	51.8%
昨年度との比較	やや易化	横ばい	やや易化	横ばい	易化	

算 数

- [1] 計算問題 (1) 小数の計算 (2) 計算の順序 (3) 分数・小数の混合計算 (4) 工夫する計算 (5) 口をもとめる計算
 [2] 一行問題 (1) 数の大きさ (2) 割合 (3) 円グラフ (4) 場合の数 (5) 会話文
 [3] 周期算 小問数：3
 [4] 平面図形・場合の数 小問数：3
 [5] 流水算 小問数：3

[1] が計算問題、[2] が会話形式を含む一行問題、[3] ～ [5] が大問という例年通りの傾向でした。

[1] は計算問題が5題です。あせらず落ち着いて取り組みましょう。
 (4) は工夫の仕方が見つからない場合でも、正面から取り組み、正解にたどり着きましょう。(5)の口をもとめる計算は、如実に実力差が表れます。広島なぎさ中は、計算問題が5題と多いので、普段からの計算練習を意識しましょう。

[2] は一行問題が5問です。(1)は数の大小を問われています。(2)は割合の問題です。全体の人数が与えられているので、順次実際の数をもとめましょう。(3)は円グラフ基本事項を問われています。(4)は場合の数です。地図上の塗り分けなので、少し難易度が高い部類の問題です。(5)は等差数列に関する会話文です。純粹に等差数列が理解できているかだけでなく、会話の流れに沿って答える必要があります。

[3] は分数を小数に変換する周期算です。(1)、(2)は典型的な問題

ですが、小数第2位から循環が始まることに注意しましょう。(3)は、4桁の数が9000個あり、1周期の和の18の倍数であることに注目すれば解きやすいです。

[4]は30度の三角定規の性質を利用した平面図形の問題です。三角定規の性質は、受験生ならば知識としては持っていると思います。誘導タイプの構成なので、しっかり誘導に乗る事が大切です。(4)は(3)までの答えを利用し、少しずつ求めていかなければならないので、地道な力がもとめられます。

[5]は旅人算です。問題文が長く、条件が複数あるので、読解力とイメージ力を要求されています。(1)は速さの比と、時間の比の関係を問われているのですが、前述の通り、読解力の面で苦戦した受験生もい

たように思います。(2)も文章を読み、イメージできるかどうかポイントになります。(3)は、文章を読み地道に求めていく問題です。難しい考え方は必要ないですが、時間がかかります。

全体として、解きやすい問題あるいは典型問題が多いといえますが、難問も混在しています。「合格する」ということだけ考えれば、半分正答すれば十分でしょう。自分にとって難しい問題はいったんおぼして置いて、解きやすい問題でしっかり得点できれば心配ありません。そのためには、過去問に取り組むことで、時間配分を意識するトレーニングを重ね、どれくらいの問題で合格点を突破できるかという感覚を身につける必要があるでしょう。

国語

I 表現に関する問題(作文(オリジナルの文章)の内容訂正+資料の読み取り)	(約350字 小問数11問)
II 小嶋陽太郎『ぼくのとなりにきみ』	(物語文 約2000字 小問14数問 うち記述3問)
III 金子勝『歴史の読み方』「答えはひとつしかないのか」	(説明文 A 約900字
瀧本哲史『ミライの授業』	B 約1100字 小問数15問)

なぎさ中学の国語には、他校にはない特徴があります。

一つは大問の構成です。「物語文」・「説明文」の読解問題2題に、数百字程度の自作文章を用いた「表現に関する問題」を加えた大問3題構成となっています。

もう一つは、「物語文」・「説明文」で、オリジナルの対話文や資料を加えていることです。ほとんどの学校の「物語文」・「説明文」の問題は、出典から文章の一部を抜き出して、その内容に基づいて作問するというものです。しかし、なぎさ中では、そこにオリジナルの対話文や資料が付け加えられます。「物語文」では、最後の問いで、国語の授業での先生と生徒のやりとりや生徒同士の会話が1ページ程度の分量で載っており、その内容から出題されています。「説明文」では、複数の出典から本

文が構成されており、**A**・**B**・**C**などに分かれています。また、設問の後半では、本文の内容を図表にまとめたものや、本文を読んだ生徒同士の会話が載っており、そこから出題されています。手間と時間をかけて、しっかりと入試問題を作っておられることがよく伝わってきます。

次に、受験者平均点を見てみましょう。国語の受験者平均点は、一昨年まで、二年連続で60点を下回り、他教科と比べて「国語は平均点が低い・難しい」という印象がありました。しかし、昨年の平均点は63.2点と大きくアップ、今年はさらに上がり64.8点で、4教科中で最も平均点が高くなりました。多くの中学校が傾斜配点(算数・国語の配点を理科・社会より高くするもの)を採用する中、なぎさ中は、国・算・社・理すべて100点の均等配点となっています。当然、教科間のバランスも

重要視していることでしょう。各教科の平均点の動向を見てみると、作問にあたっての受験者平均点目標は、ズバリ全教科 60 点（当たっているのでしょうか？）。そう考えると、国語の平均点は、2014 年以降は 6 年連続で 60±6 点以内に収まっています。見事です。

では、以下に大問ごとの設問内容を見ていきます。

I 表現に関する問題(A、Bに分かれて出題されています)

Aは、「スマホ利用者のネット利用時間」の調査結果をまとめたグラフを見て書かれた作文について答える問題でした。内容は、不適切な表現（口語表現・誤用・若者言葉）を直す、本文の空欄に入る項目をグラフから読み取る、作文の内容に対する 6 つの意見から、適当なものを選ぶというものでした。一昨年・昨年に引き続き、グラフの数値の読み取りも出題されています。問 4 の記号選択問題では、「次のア～カから当てはまるものを全て選び」とあり、解答欄も長四角が一つだけなので正解の数もわからず、受験者は何度も自分の解答を確認したことでしょう。正解を絞り込むためにじっくり考えさせる良い出題だったと思います。

Bでは、「漢字しりとり」が出題されました。文脈から言葉をイメージ出来ないで、語彙力だけが頼りという難しさがあります。「白→②→気」の出題部分では、「人・湯・熱」など、数種類の答えが考えられます。

II 物語文の読解問題

設問構成は、漢字の読み書き、記号選択(心情把握)、内容把握の記述(50 字)、心情把握の記述(40 字・60 字)、内容理解の空欄補充(場面分け、語句の組み合わせ、人物像の記号選択、記述 50 字)などで、内容に

目立った変化はありません。記述も例年通り、40 字・60 字（4 つの指定語・一文の条件付き）・50 字としっかり出題されています。問いそのものは、決して難しいものではありませんが、50 字前後の長さであれば、主語と述語だけの単文とはいきません。正しい日本語を書く表現力が必要となります。小学校との連絡帳、係の日誌や日記など、日頃から文を書く機会を増やし、それを推敲する習慣も付けるよう心がけましょう。

III 説明文の読解問題

設問構成は、漢字の知識（単純な書き取りではなく、同じ漢字を使っている用例選択。この形式は 2014 年以降の説明文で毎年出題されています。なぎさ中の説明文定番問題と言ってよいでしょう）、慣用表現、内容把握(書き抜きの空欄補充、～字以内の字数指定あり)、内容把握の正誤選択でした（対話文）。前述した、本文の内容を図式にまとめたもの(随所に空欄がある)が後半の問 3・4 で出題されています。記述問題は、一昨年が 35 字・60 字の 2 題、昨年が 10 字の 1 題でしたが、今年はついに「出題なし」となりました。説明文の読解力は書き抜きだけで測れるという判断でしょう。

今年のなぎさ中学の国語は、ここ数年の問題構成・出題形式を踏襲しており、その意味では大変安定していると言えます。入試対策として、3～5 年分の過去問をしっかり解いて、出題形式に慣れておくことをお勧めします。難問・奇問の出題はありません。正しい語句の知識と本文の内容をしっかりと読み取る力をつけましょう。

理 科

- 1 地学分野から、流れる水のはたらき・地層 に関する問題（小問9）
- 2 化学分野から、いろいろな気体 に関する問題（小問7）
- 3 物理分野から、物の運動 に関する問題（小問8）
- 4 生物分野から、動物 に関する問題（小問9）

出題分野の偏り。これは、同校の入試問題の構成の特徴の一つですが、今年度はその偏りが見られることはなく、地学・化学・物理・生物の4分野から1題ずつバランス良く出題されていました。また出題内容としても、語句や文章記述、計算、実験考察など幅広くなっていました。

1 流れる水のはたらき・地層に関する問題です。(1)～(4)は難なく正解できたでしょう。(5)は、曲がっている川の内側と外側の水の流れる速さと川の深さのちがいについての記述です。記述の解答らんとしては小さめな上に、2つのことを答えなくてはいけないため、ポイントを押さえた記述が書けたかどうか重要です。(6)②は、ア～キの中から条件に合う選択肢をすべて選び、それを正しい順番に並べ替える必要がありました。(7)は、地震のゆれが収まった後にとるべき行動を答える記述です。受験生は、その前の断層などを絡めて答えるのか、ただ安全な場所に避難することを聞かれているのかを迷った生徒がほとんどだったと思います。

2 いろいろな気体に関する問題です。(1)～(4)は全問正解したいところです。(5)・(6)の計算は、決して難易度は高くありませんが、単位の変換や小数点など計算間違いをしやすかったはずです。(7)は、火事で避難をするときに低い姿勢で歩く理由を答える記述です。煙は熱いため上に広がり視界が悪くなること、煙の少ない床に近い方が酸素濃度が高いことの2点がポイントになります。

3 物の運動に関する問題です。同校の特徴の一つで、多くの実験結果が表に整理されており、それをもとに問題に取り組んでいきます。実験結果から分かることを正確に読みとることが大切です。同校の過去問にも同じ形式（出題分野は異なる）の問題が出題されていますので、戸惑いはなかったでしょう。

4 最後に、もう一つの同校の特徴といえば、先生となぎささんとの長い対話文からの問題です。今年のテーマは【動物】でした。せきつい動物に関する基本知識を答える問題、イカやタコ・こん虫に関連づけた問題、魚類とほ乳類の動きの違いを答える問題など、幅広く出題されました。その中でも(7)のフナの泳ぎ方とライオンの走り方の違いを答える文章記述は、受験生のどれだけの生徒が正解できていたのか非常に気になります。

前述したとおり、解答形式も多様で、説明文や会話文も長いため、決して取り組みやすくはありません。ただ、そういった中でも基本問題が多く含まれているのも事実です。それらの基本問題をきっちり正解すること、そして途中に含まれている難問を勇気を持って飛ばして先へ解き進んでいくことが大事です。同校の対策として、基本知識を正確に理解し、基本～標準レベルの典型問題を何度も練習しましょう。そして、文章記述の割合が増えていますので、過去問演習に取り組むときにも、すぐに諦めるのではなく必ず自分の手を動かして書く練習をしましょう。

社会

- 1 《地理》甲子園球場に関する地理問題（気候・人口・農業・交通）（15問）
- 2 《歴史》世界遺産関連の歴史問題（飛鳥～明治時代）（17問）
- 3 《歴史》明治時代以降の東アジアをめぐる動きに関する問題（9問）
- 4 《公民》国会・内閣のはたらきと地方公共団体，人口変化に関する問題（10問）

2019年度は小問数が51問で、昨年の53問とほぼ同じ出題数でした。地歴と公民の問題の出題比率はおおよそ8：2の割合で、地理と歴史中心の出題といえます。問題数の内訳は、記号選択(23問)・語句記述(22問)・文章記述(6問)となっています。基本問題中心の出題ではありますが、資料や表、図などの読み取り問題が多く出題されています。また記号選択問題において、「すべて選びなさい」という設問が見受けられました。解答する選択肢の個数を指定せずに出題すると、難易度は途端に高くなります。ただし全体の難易度は例年並みで受験生も取り組みやすかったと思います。

1は会話形式で、甲子園球場に関する地理問題でした。地形図の方位や縮尺の計算といった基本的な内容のものが多かったです。しかし問2の1941年～1945年に甲子園の大会が中止になった歴史的な背景を答える問題、問3の五日市駅から甲子園に行くのに通過する都道府県を答える問題など、受験生に考えさせる問題も出題されました。

2は世界遺産関連の歴史問題（飛鳥～明治時代）でした。基本的な内容からの出題なので、ほとんどの受験生が解きやすいと感じたと思います。問3の平清盛が整備した厳島神社が「平氏一族の繁栄」以外の願いについて答える問題や絵や資料を見ながら答える問4・8・10のような問題もありました。語句だけでなく、関連するビジュアル資料(史料)に触れておく必要があります。

3は年表形式で、明治時代以降の東アジアをめぐる動きに関する問題でした。今年是他の中学校でも「福沢諭吉」「領事裁判権」に関する出題が多かったです。問2の福沢諭吉であれば、著書である「学問のすゝめ」の概要の把握が必要です。問4の領事裁判権については、受験生の中には語句は知っているが、その内容を含めて自身の言葉で説明できる生徒は少なくなります。また問5の日清戦争で獲得した植民地を地図上から選択する問題や、問6の日露戦争当時の状況として正しい内容を選択する問題、問7の大日本帝国憲法の内容で誤っているものを選択する問題のように、単純な語句暗記では対応できない、ただし基本事項の内容が問われていることが特徴です。知識と知識を結びつけて問題にあたる必要があります。

4は新聞記事をリード文にした形式で、国会・内閣のはたらきと地方公共団体，人口変化に関する問題でした。内閣の担当省庁や閣議に関する問題や、日本の将来推計人口や人口ピラミッドに関する問題が出題されました。問7の人口減少の対策として子育てしやすい環境を整備するにはどうすればよいか、例を参考に具体例を挙げて説明する問題がありました。おそらく、多くの受験生は問題文の例にある「保育所の増設、待機児童の解消」を考えたはずですから、戸惑ったはずです。

全体的に基本的な問題が多いですので、地理・歴史・公民の基礎知識を確実に身につけておくようにしておきましょう。